「志ある卓越。」を志す

福山陸
松江北高　2024年卒、75期
東京大学法学部
(2026 年4月近況報告)

　新年度とともに、本郷キャンパスでの生活が始まった。ここにある全ての建物が、荘厳さと華麗さを兼ね備えている。加えて、キャンパス内の随所に見出される歴史の痕跡が、この場所の魅力を深めている。構内での不思議な高揚は、高校二年生で初めて訪れた時から少しも変わらない。ちなみに、当時は試験場の下見のつもりで訪ねたが、文科各類の会場は駒場キャンパスであることを後に知った。詰めが甘い悪癖も、当時から変わらぬものの一つである。

さて、私は3年生となり法学部に在籍している。既に昨年度から、法学・政治学系の講義が始まっていた。しかし本郷での講義は、質・量ともに大きく異なる。法学においては、民刑の続編に加え、会社法や行政法など、学生生活ではおよそ馴染みのない実定法科目が並ぶ。政治系の科目では、より具体的かつ実際的な講義が始まる。

大学進学に際し、法学部に進むつもりで文科一類を選んだ。自己の適性への当時の見立ては、成績等を鑑みるにおおよそ当たっていたように思う。また幸か不幸か、昨今の世界情勢は、法や政治といった「共存のアート」に関する好奇心を高めている。無論、私の関心に対し、日々の講義は十分に応えてくれる。直截に言えば、本郷キャンパスでの生活はとても充実している。

他に注力しているのは、個別指導塾でのアルバイトである。始めて2年経つが、最近（妙に）評判が良く、指名を賜ることも多い。プレッシャーを感じもするが、授業準備や授業には以前に比して熱が入る。翻って、私は授業中に、生徒の学校生活についてよく尋ねるのだが、雑談に過ぎぬやり取りの中で、島根と東京との多様な違いに気がつく。同時に、地方出身者たる私の問題意識が、徐々に輪郭を与えられるのを感じもするのである。斯様の意味で、塾講師業は今や私の生活の一つの軸となっている。

学生生活は既に折り返しを過ぎた。残された期間においても、自らを種々の面で研磨していきたいと考えている。最後に、東京双松会の一層の発展並びに会員の皆様のご健勝を祈念して、擱筆することとしたい。